

世界觀の問題 (承前)

高山岩男

十

私は次にヘーゲルの精神現象學 (Phänomenologie des Geistes) に於て其の特色をなすと思はれる二三の點をば明かにし、第七、第八、第九の三節に於て生命の純眞非純眞的構造を中心として解釋された生の辨證法を念頭に置きながら、ヘーゲルの精神現象學は如何に生の哲學及び世界觀說として見られ得るか、而して又何處に生の哲學及び世界觀說としてとり難く思はれる點をば内在するか、これらの點をば批判的に明瞭にしてみたいとおもふ。

ヘーゲルは精神現象學をば「意識の經驗の學」 (Wissenschaft der Erfahrung des Bewusstseins) と稱した。それは意識の經驗の學である限り論理學の如き純粹なる「理念そのもの」學であるべき筈はなく、又世界史の如く時間の中に於ける世界精神の解釋を主旨とするものでもあり得ない、少くとも我々はかく考へるべきであり且考へることが出来るであらう。精神現象學に於ては精神は歴史的なる時の中にあることを

その根本的なる存在の様態とするものではなく、又自己自身の論理必然的展開をその本質の様態とするものでもない。それは歴史や論理と異なる特殊な精神の存在の様態をもたねばならぬ。然らば精神現象學の、従つて又その辨證法の特徴は如何なるところに存するのであるか、所謂「意識の經驗」とは先づ如何なることを意味するのであるか。

我々は精神現象學の根本的に他より區別さるべき著しき特色を次の點に見出し得ると思ふ。即ち精神現象學は常に意識に於ける「知るもの」と「知らるゝもの」或は「知る」と「對象的なるもの」の間の双關係を中心として展開され、その辨證法は意識さるゝことを離れて自己自身に於て展開せらるゝものではなく、常に「意識に對する現象即ち意識の形態」(Gestalt des Bewusstseins)のみが、知と對象の双關係、その反省に於て(即ち兩者の同一、對立、不同一、同一化等、その自己内反省の動向に於て)意識の自覺過程として發展觀察され、それら意識形態の組織體系たる學としての精神現象學は現象學者即ち哲學者に對して成立すること、換言すれば精神現象學は意識の本質たる「知る」と「對象的なるもの」の辨證法的關係よりすべての意識形態を(而してすべて意識形態たる限り)兩者の十全なる合一、充實を目標とする辨證法的推移に於て見

意識の經驗の學たる現象學は觀察さるゝ意識に對しては、觀察する哲學者に對してのみ成立し得ること——こゝに精神現象學の特色を見得ると思ふ。精神現象學は何等の特殊なる立場にも、假定にも、又學的方法にも媒介せられざる自明の直接なる意識即ち「自然的意識」(das natürliche Bewusstsein)より出發し、すべて意識の形態のみを、或はすべて意識の形態である限り、或はむしろすべてを意識の形態としてのみ問題とし考察する。それが意識を越え意識さるゝことを離れて元來それ自身の存在をもつ精神や理念そのものゝ必然的なる自己展開であるか、或は時の中に於て世界史的に現れた精神現象の必然的なる系列であるか否かは、假令精神現象學が完全に遂行され、その最後の立場に達した後、に於ては問題となるにせよ、精神現象學そのものゝ直接なる問題ではない。殊にそれは原理上現象學者や現象學の出發點に立つ者の問題たるべきものではない。精神現象學の展開の原理並びに精神現象學者の志向するものは、かくの如き論理的或は歴史のものに存するのではなく、全く別のところに存する。精神現象學はヘーゲル自身云ふ如く、意識の經驗の學であり、意識の形態を内容とするのであつて「意識に對して」(für das Bewusstsein)といふことが精神現象學の究極的なる特色をなす。これが精神現象學に於ける精神の在り方を

論理學と歴史哲學のそれより區別して特色づけるものである。それは意識に於ける精神の存在の様態をその全體性にわたつて觀察するものに外ならない。精神現象學に於ては精神は常に意識として、或は意識に於て現れなければならぬ。意識として意識に顯現せざる如き精神は正當には精神と云はるべきものではない。これは或は全く自明のことゝも思はれるであらう。併しこれが元來意識と云ふものを問題とすべき筈のない又することの不可能なるヘーゲルの論理學と歴史哲學に於ける精神の存在の様態より區別するところの特色なのである。この意識の形態の發展、推移、生成その過程を觀察するものが現象學者或は哲學者に外ならないのである。勿論こゝに意識と云ふは對象的なる時の中に生滅變化する個人的、經驗的なる意識を意味するものではない、又現象學者と雖も觀察せらるゝ意識に超越的に外にあるのではない。精神現象學も畢竟は「ことから自身の内面的眞實態」の必然的なる展開の敘述に外ならないのであるが、それは決して論理學に於けるが如き純粹なる理念そのものゝ何等それに對するものなき論理的自己展開ではない。論理學に於ける理念の自己展開は現象學に於ける如く「意識に對して」の存在の様態をば問題とするものではない。否むしる意識に對する關係を撥無するところにこそ正に論

理學が論理學たる特色を保持すると云ひ得るのである。現象學に於てはこれと異なる。而して現象學者は觀察せらるゝ意識ではなく、又意識の展開・生成 (Werden) の過程はそれ自身生成しつゝ觀察せらるゝ意識に對してははなく、たゞ現象學者に對してのみ初めて考察せられ得るのである。現象學者は意識の種々なる形態の生成・發展に對しては不可缺なる双關者たるものであつて、我々が正しく解釋するならば、これは常に或段階に於ける意識の經驗の終局、即ち次に來るべき新しき意識形態の立場に於てその展開生成の過程そのものを見るものなのである。精神現象學はかゝる現象學者によりて觀られた意識の形態、その經驗の「記載」に外ならない。この意味に於て現象學者は究極的にはヘーゲルの所謂絶對知 (das absolute Wissen) の立場に立つことを否定することが出來ぬであらう。勿論精神現象學の最後の段階が絶對知の如きものなるか否か、現象學者が必ずこの絶對知の立場に立つべきか否かには種々の疑問が存し得る。併し乍らそれは依然として精神現象學が事象自體の内面的眞理の展開を追ふことを妨げるものではない。かくして精神現象學はかゝる存在の様態に於ける「意識の經驗の學」である。これが精神現象學の最も根本的なる一般的特色に外ならない。

意識の根本的構造は、それが最も抽象的にして直接なる自己同一の意識より出發するにせよ、直ちに「知ること」と「知らるゝもの」との對立に、或は知と對象の對立するところに存する。かゝる構造を離れては意識と云ふことが無意味であり、意識と云ふものは成立することが出來ぬ。この場合知らるゝもの或は對象は必ず知ること即ち知よりは離れて獨立に存在し、それとは異なる別のもの他のものでなければならぬ。意識に於ては直接にはかゝる相異なる知と對象が互に對立するのである。若し知ることゝ知らるゝものが同一であるならば、知と對象が一つのものであるならば、元々知ると云ふことも知らるゝものと云ふことも成立する筈はない。知と云ひ對象と名付けることが元來無意味である。この自然的意識に於ては、知らるゝもの、對象的なるものは、知る意識をば離れてそれ自體に存立し、これが知に對しては眞實の自體であり、本質と云はるゝものである。我に對しては正に實體なのである。即ち對象は「自己自身に於て存在するもの」であり、知は之に反して「他に對して存在するもの」と云はれなければならぬ。換言すれば眞理は對象的なるものになり、或は對象そのものであつて、知ることや意識とはこれに關係することに過ぎない。それ故我々が知の眞理を研究することはこの自體に於て存在する對象をば研究することに外なら

ないのであり、兩者の一致、合一が實は眞理と稱せらるゝものに外ならないであらう。併しながら、假令他と離れて自己自身に於て存立する對象であるにせよ、それが知られるものであり、知ることに對立するものである以上、必ず知の對象でなければならぬ。直接には知ることを離れて自體に存立する如くおもはれた對象も何等知に超越した存在としての對象ではなく、實は知の對象に外ならないのである。かゝる知の對象たることを離れては元來對象なるものは存在する筈がない、對象とはたゞ知ることに對してのみ初めて本來の意義に於いて對象たることが出来るのである。知ることに對せざる對象は對象ではない。それ故我々が今對象の本質としたものも、實は對象自體の眞理ではなく、知に對する眞理或は知の眞理に過ぎないのである。併しこの意味以外に於て對象たり眞理たるものが全く不可能であり且全く無意義である以上、嘗て確實性の基礎を對象に置いた意識も今は最早やそれによつて何等確實性の保證を得ることは實は出来ない。對象も、その眞理も、それが存在する限りは、必ずしもたゞ、知ることに對してのみ對象であり眞理であり得る。こゝに於て眞理の標準をそれ自體に存在するとおもはれた對象に置いてそれと比較した意識は今やその標準を自己自身の中に置いて實際には自己が自己の中に於て自己自身と

比較してゐるに過ぎないのである。換言すれば嘗て知ると云ふことの本性上正に知ることに超越し、知ることよりは離れて自己自身に於て存在した筈の對象や自體 (das Ansich) は、今や又正に知ると云ふそのことの爲に、實は知を超越しそれより離れた對象や自體でなく、常に知ることに對して初めて存在するもの即ち意識の對象であり、意識に於ける自體に外ならないのである。かく「知ること」が眞に成立するためには對象は「知ること」に超越的でなく、むしろ内在的でなければならぬ。逆に云ふならば知ると云ふことは對象に相對立する如き一つの作用なのではない、意識とは對象と並列する如き一つの現象ではない。對象的なものを包みて初めて知ると云ふことが成立するのである。かくして對象の意識は對象の意識なる故に必然對象の意識の意識即ち知ることの意識となる。換言すれば意識は自己自身の意識即ち自覺となつたのである。これが對象の意識の眞實態、知ることの本義でなければならぬ。自覺が意識の本質である。

精神現象學によれば意識は斯の如く一方に於ては對象の意識であり、他方に於ては自己自身の意識である。即ち第一の意識は、直接には意識にとつて眞實なる自體を、それ自身に存在するところのものを意識することであり、正にかゝることを意識

することが第二の意識である。この第二の意識が第一の意識の眞實態であつて、自覺である。第一の意識は必然第二の意識に轉ずる、第一に於て眞實と考へられた自體、即ちそれ自身に於て存在するとおもはれたものも實はその意識に對しての存在、對意識的存在 (Für-das-Bewusstsein-Sein des Ansich) に外ならないのである。それ故もし知ると云ふことが對象と一致すると云ふことであるならば、それが一致せざる場合には意識はむしろ知をそれ自體に眞なる對象に一致するやうに變せねばならぬであらう。併し今知りたるが如く、對象とはその眞實の姿に於ては實は對意識的存在としてのみ存在するのであり、意識に超越した對象自體の如きものはない。知とは元來かゝる對象の知に過ぎなかつたのである。従つて知が變るときには實際には對象そのものも亦共に變せざるを得ない。對象のみ不變で知のみ變ずると云ふことは意識に於てはある筈がない。何となれば自體なりしものも實はたゞ意識に對しての自體に過ぎなかつたからであり、知の様態が變ずるなら、それに對應し、それに知らるゝ對象は同一の姿であることは不可能だからである。こゝに精神現象と云ふものゝ特色がある。對象と知の以上の如き關係に於けるかゝる變化より嘗て對象たりしものは當然その意味を變じ、その形態を更めて新らしき別種の對象と

なる。こゝに新たななる一つの意識形態が見らるゝに至るのである。嘗て自體とし眞實として存在せしものは、たゞ無反省なる「自然的意識」に於てのみ、直接の意識に對してのみ眞實であり自體であつたのであつて、その反省による眞實態に於ては、それはたゞ意識に對する「自體や眞實に過ぎないもの」となり、これが今や本質であり、新しき對象なのである。これが意識に於ては前とは姿を異にする新らしき一つの意識形態に外ならない。従つて自體と知の間に存立するとされた無反省の自然的意識に於ける眞理の如きものは最早や考へることは出來ぬ。眞理は意識の自覺に於て今やこの新しき對象に移つたのである、否むしろ究極的にはかゝる意識の發展自覺の推移以外に眞理は求むることが不可能であらう。精神現象學が意識の「經驗」(Erfahrung)と稱するものは實に以上の如き意識の推移の過程即ち自覺を意味するものに外ならない。意識の「經驗」とは即ち自己に對して自己ならざる超越的對象を眞實なるものとして立つる「自然的意識」に於て未だ自覺せられざる意識の眞實態が、換言すれば實は自己と對象の對立の基底に常に存し、それを包み對立の意識を動かすところのより具體的全體的なる意識の眞實態がその反省に於て自覺せらるゝに至り、超越的對象が内在化せらるゝに至る意識の推移過程を云ふものに外ならない。精

神現象學に於て特有の意義を擔ふ自己内反省(Reflexion in sich)とはかゝる意識の經驗即ち自己の眞實態(Wahrheit)の自覺そのものを意味するものであり、かくの如き意識の經驗が即ち精神現象學の辨證法に外ならぬ。

ヘーゲルが精神現象學の Vorrede 及び Einleitung に於て述べてある精神現象學の方法を以上の如く特色附け得るとするならば、我々はこれを次の如くにも言ひ現し得るであらう。ヘーゲルの精神現象學は意識の經驗の學であつてそれは飽く迄意識の經驗、即ち知ることゝ知らるゝものゝ双關々係に於てのみ見られ得る意識の經驗、及び意識の經驗の發展に於て現れ、觀らるゝ意識の形態をその唯一の内容とするものである。これが「精神現象」の學に外ならないのである。この場合知るといふことは、意識そのものゝ本質たるしること、意識することであつて、それ自身精神現象學の中に於て一つの意識の經驗として觀察せらるゝ知的認識或は悟性的認識の如きを意味するのではない。それは認識論的意味に於ける認識と對象の關係を意味するのではなく、精神現象學は認識論的立場や態度に於て對象の構成を明かにし、それと知の關係を問題とするものではない。前に明かになつた如く、眞理とは知的認識の眞理、文章の意味の眞理の如きものではない、靜止的妥當なる對象的眞理、理論的眞

理ではない。詳しく云へば精神現象學に眞理と云ふものは、或る對象と認識の間の
 妥當的關係に成立するのではなく、むしろ意識形態と意識形態の間の發展關係に存
 するのである。眞理と云はれるものは意識の經驗、そのものゝ眞實態を意味するに
 外ならないのである。かく意識の根本的構造としての「知ること」と「對象的なるもの」
 の關係に於ける「知ること」が以上の如き識ること、意識すること以外の何ものでもな
 いことは具體的なる精神現象學の内容より見ても明かに云ひ得るであらう。對象
 はその場合狭く物的存在、認識の對象を意味するのではなく、廣く意識の經驗のすべ
 てにわたつて「しらるゝもの」「對象的なるもの」「自己に對立するもの」「自己ならざるも
 の」一般を意味するのである。それは自己に對する他の自己、自己を越ゆる社會的、普
 遍的存在をも含む。それを感性的、非我的存在に限局するは甚しき誤解である。併
 し乍ら云ふ迄もなくヘーゲルにとつては意識の最も具體的なる眞實態は絶對知で
 あり、絶對知が意識の經驗の最後の段階であつて、こゝは「概念」の立場であると主張さ
 るる限り、意識の經驗並びに精神現象學には何等か主知主義的、合理主義的陰影が常
 に伴つて居るであらう。勿論精神現象學は合理主義の立場に立つのではない、又我
 々は後年の徹底した汎論理主義の如きものを精神現象學に於ては見得るものでは

ない。併しヘーゲルが精神現象學を意識そのものが學にまで教化され組織され行く歴史に外ならないと考へるとき、又學への道自身が學をなし學そのものに外ならぬとするとき、こゝにその主知主義が存することも考へ得られるであらう。併し後に明かになる如く、精神現象學はかゝる立場に立つことを本質とするものではない、又かゝる主知主義に立つことを必要とするものでもない。意識は知的意識のみではなく、意識の經驗は理論的意識の經驗のみではないのである。知とはしること、意識すること以外のなものでもなく、對象とは對象的なるもの、自己ならざるもの一般以外の何ものでもない。斯の如き意味に於て精神現象學は知るものと知らるゝもの、知ることゝ對象的なるものゝ關係、それらの對立より出發し常にそれを意識の根本的構造とする。我々はこれをノエシスとノエマの對立、その關係より出發し、それを意識の本質とするものと云ひ得るであらう。それは常に「意識に對して」すべてを見るのであり、精神現象學は常に意識に於ける「知ること」と「對象的なるもの」より意識の經驗と意識の形態を觀るのである、かゝるノエマ・ノエシスの構造を離れて「意識の經驗は成立することが出來ぬ。精神現象學に於てはヘーゲルによれば全體の契機はすべて「意識の形態」であり(Lasson-Ausgabe S. 63)、「意識は意識の經驗にあるもの以外

は何ものをも知らず又理解もしない」(のこ)のである。精神現象學に於ては(直接にはヘーゲルの他の體系に於けると異りたる意味に於て)すべて意識に超越的なるものはなく、皆内在的である。精神現象學に於ては意識に超越的なるものを立つる自然的立場はすべて廢棄せられる。それは自然的立場を還元して意識に内在的なるノエマ・ノエシスの構造より意識の形態を研究するものであり、精神現象學もヘーゲル自身要求する如く純粹なる學たる限り單に事實の立場に立つものではなく、意識の本質を研究し觀るものに外ならない。それは何等構成的方法によるのではなく、かゝる意識の形態の記述である。精神現象學は自然的立場に立ちて經驗的事實を研究する事實科學或は所謂經驗科學でないのは云ふ迄もないことである。その内容が假令歴史的事實を背景とし、そこより内容をば取り來るにせよ精神現象學の立場に於ては歴史的の事實ではなく、又歴史的個人的の事實、たることはその本性でない。それは一種の先驗的なる本質としての意識形態、精神現象に過ぎないと云ひ得るのである。元來ヘーゲルの所謂「概念」と稱するものも實はかゝる「形相」に外ならないのである。この點に於てはヘーゲルの精神現象學も亦意識の現象學としてフッサールのそれと軌を一にすることは確かに否定し得ないであらうと思ふ。

併しながら精神現象學がフッサールの意識の現象學と軌を一にするはたゞこの點にのみ止る。ヘーゲルの精神現象學は單なる純粹意識の學に止らずして意識の經驗の學である。意識の經驗は純粹意識のものではなく、又純粹意識に止るものではない。精神現象學に於ける意識の經驗にとつては學的なる還元の方法を行つて後に觀らるゝ靜的構造の純粹意識の如きは、恐らくは一つの意識の經驗、一つの意識形態に過ぎぬであらう。精神現象學は意識の現象學よりはより具體的、事象的な態度に立つ。精神現象學に於ては意識の形態や現象は現象學的還元を行つて後初めてその構造が觀らるゝ如きものではない。精神現象學は意識以外の他のものによつて還元の如き方法に媒介せられた意識を見、それより出發するものではない。精神現象學に於けるヘーゲルにとつては現象學的還元、本質直觀の如き精神の態度そのものが、恐らく、精神現象學の或段階に於て見らるゝものであらう。精神現象學の現象學者は意識そのものには見られざる意識の生成の過程即ち意識の經驗を見るものである、而してたゞそれに止る。併しそれは決して見らるゝ意識に超越的な、それとは全く異なる者としての現象學者ではない。むしろ精神現象學はその具體的な内容遂行の如何なる段階に於ても直接には自然的意識の立場に立ち或は自

然的意識であり、かゝる自然的意識が意識の經驗に於て自づと止揚され、自然的意識に於ける超越的對立、自然的對立がその不同、矛盾を自覺するに及んで自覺の新しき意識形態に自ら反省、還歸され、この立場に於て以前のもものは自覺にすべて内在的となるのである。この過程が意識の經驗であり、この自覺の立場が自然的意識の「眞實態」に外ならない。いはゞ意識の經驗に於ては自然的立場がその立場の自省に於て自然に廢棄、止揚せられて、すべてを意識に内在せしむる立場に轉ずるのである。意識の經驗とは直接の出發點に於ては何等學的方法の媒介をも經ざる自然的なる立場がその反省によつて自ら否定され、すべてを内在化し自己と同一のものとする自覺の立場に達し、かゝる直接の自覺の立場が又反省せらるゝに及んで新しき對立と矛盾を意識する境位に至るやこれが又一つの新しき自然的意識として現れ、この自然的立場は又自ら止揚せられてすべてを内在化する新しき他の自覺に到達するこの限りなき意識の運動、體驗の過程そのものに外ならないのである。意識の經驗に於ては飽く迄も平行的境位にある「知ること」と「對象」が相對應する構造をもつのではなく、かゝる對立は經驗に於て統一され統一は又分離せられて常に辨證法的發展をなす。他の言葉を以て表現すれば「存在」と「思惟」は平行的對應でなく辨證法的統一を

なすのである。精神現象學に於ては自然的立場もそれ自體一つの意識現象であり、それが自覺に於て止揚されすべてが意識に内在化さるゝことそのことが換言すれば自己内反省の自覺そのものが正に意識の動的なる本質をなすのである。これは意識の直接的なる抽象の様態が體驗の具體的なる様態を漸次自覺することに外ならない。その際抽象的なるものが具體的なるものを「基ける」のではない。意識に於てはむしろ具體的なるものは抽象的なるものゝ基にあり、抽象的なるものは實はそれに於てあり、それに於て動かされ、それが抽象的なるものゝ眞實態でありながら、未だそのことを全く知らざりし立場が初めて自覺するに至るのである。換言すれば抽象的なるもの、部分的なるものは正に抽象的、部分的なるとき實は常に具體的、全體的なるもの、それとの聯關に於て成立し得るのであり、それに自ら推移しそれを自覺することが意識の本質に外ならないのである。この全體的具體的なるものを自覺することが意識の經驗と云はれてゐるのであつて、その本質はかゝる自覺的構造にある。それは「基付け」(Fundierung)に非ずして明かに辨證法である。

ヘーゲルの精神現象學はかくの如く自然的意識より出發するのであつて、ヘーゲルが精神現象學は眞實の知に肉迫する自然的意識(Das natürliche Bewusstsein)の道を進

み、これは精神に醇化するに至る迄種々の場所や立場を自己の形態として遍歴する意識の道であり、かゝる自己自身の經驗を経て初めて眞實なるものゝ知に到達すると云ふのは(φ. 55) 正に以上の特色を表現する。かゝる意識の辨證法は精神現象學の辨證法の獨特なる特質をなす。精神現象學はかくの如くその學的立場として何等特殊なる還元を行ふものではなく、そこに見らるゝ意識形態の階層は基づけに非ずして辨證法的推移或は發展である。精神現象學に於ては或る種々なる現象が各々ノエマノエシスの構造より見らるゝのではない。ノエマ、ノエシスの對立的雙關係は辨證法的推移に於て漸次意味を變じ姿を更めて新しき雙關係に轉ずるのである、即ち新しき別種の意識形態になるのである。知ることの自己内反省は新らしき對象的なるものゝ展開であり、こゝに元來はノエシスとノエマを包む新しきノエシシ的なる一般者全體者への自己内反省があるのである。兩者の關係の變化が新しき意識形態への發展なるこの辨證法的過程が即ち意識の經驗の本質そのものに外ならない。精神現象に於ては自覺が深まるにつれて、一層深き對象界を見得るのである。ノエマ、ノエシスはいはゞ靜的なる對立をなすものではなく動的なる辨證法的發展をなすのである。かゝる様態の辨證法的發展をなすことが元來精神現

象の特色である。この場合辨證法はノエマとノエマの間に或はノエシスとノエシスの間に行はれるのではない、かゝるものは共に未だ意識の經驗、或は精神現象と云ふことは出來ぬ。それはノエマとノエシスの間に、知ることゝ對象的なるものゝ間に於てのみ初めて成立する。而して両者が既に對立の關係にある限り對立を超え兩者を包む全體的のものが意識に存せねばならぬ、勿論これは未だ潜在的に存在するに過ぎない。これが自覺さるゝことが即ち意識の經驗の本質であり従つて意識の辨證法の本質であり、これはノエマ的、對象的ならざるもの、即ちノエシスの、知ること自身の自覺として「自己内反省」なのである。既に述べた如くかゝる推移の構造を「意識の經驗」はもつのであつて、かゝる道が即ち精神現象學の道に外ならないのである。而してすべてが意識の形態であり、それが精神の自己内反省たることは精神現象學の長き遂行の道を経て初めて明瞭に證得さるゝに過ぎない。この道程に於て自然的意識も漸次その意義を變じ、新しき自然的意識は古きそれと姿を異にするにいたる。自然的意識とは廣く自己に超越し自己に對立する他者の存在の意識に過ぎないのであつて、精神現象學の「自覺」の領域以後、意識は何等かの形で常に内在的な立場に立つものであらう。併しそれは飽く迄も他者を自己ならざるものとし、遂に

はそれは自己と他者と矛盾對立する意識にまで進むのであつて、鬭爭、死等の境位に於て未だその基底にある全體者の自覺に達せざる限り、それは依然として一つの自然的意識たるを失はない。精神現象學の意識の經驗は内面的なる辨證法的推移に於て漸次具體的なるものに進み、「自覺」と「自覺」の對立的段階に至るに従つて、矛盾的對立、鬭爭的對立の境位を本態とするに至る。これは決して直接には自覺の内在的立場と云ふべきものではない。辨證法も眞實にはかゝる「自覺」の領域に於て十全なる面目を發揮し、これが實は具體的なる生の現象に外ならないのである。こゝに至つて辨證法の道をとるヘーゲルの精神現象學は到底フッサールの現象學とは一致し得ざる點を内在することが理解し得ると思ふ。

自然的意識より出發し、その内面的なる辨證法的發展より對立を内在化するに至る精神現象學の自覺の道は、すべての對立が止揚され、超越的なるものが完全に内在的となつて知と對象が十全に合一するに及んで初めて辨證法的推移の過程を終止するであらう。ヘーゲルによればかゝる意識の形態は「絶對知」である。絶對知は精神現象學の最後の段階として何等矛盾的對立をば直接には含まざるものでなければならぬ。これが「概念」の世界であり、學の立場である以上、精神現象學はヘーゲルの

云ふ如く「學の生成」の叙述に外ならぬであらう。今我々がこゝより省みるべき精神現象學なるものは意識の形態の學なると共に、すべての現象を精神現象なりと主張する一つの哲學的、世界的、世界觀に到達する如く見える。精神現象學はかゝる哲學的世界觀成立の必然性を長き意識の經驗の道を経て證明するものゝ如くに思はれる。而も最後の立場が絶對知であり、この絶對知が若し論理學の立場に外ならないとするならば、精神現象學の歸結は所謂汎論理主義や絶對的唯心論の如き哲學的世界觀成立の途を開くものともなるであらう。これが精神現象學に於ける意識の經驗の當然到着すべき不可避的な世界觀的歸結の如く思はれるでもあらう。併し後に明かにさるゝ如くこゝにヘーゲルの精神現象學の一つの難點が存すると考へられるのであつて、我々はかゝる歸結を精神現象學の意圖並に方法にとつて本質的のものとするには出來ぬと思ふ。絶對知が、或は學の立場が意識の經驗の最も充實せられたものと云ふことは不可能である。かゝる歸結は現象學の避く可からざる唯一の歸結や目的ではない。尙正當には絶對知をかくの如く解釋すべきでもない。元來ヘーゲルにとつては純粹なる本質そのものゝ運動自體が學たることの本質をなし、現象學の方法の如きものも純粹本質の全體の組織そのものに過ぎない(S. 32)。學

的認識は何等特殊の立場や方法を豫めとることなく、たゞ存在の生命に身を委せ、その内面的必然性を辿るべきである。(S. 36)。換言すれば精神現象學者はたゞ *innere Wahrheit der Sache* を虚心に見るべきもの、これが精神現象學を貫く不朽の道であり魂であつて、精神現象學に於ける最も根本的なるヘーゲルの精神に外ならない。

我々は此處に於て以上の論證より明かに次のことを知ることが出来るであらう。精神現象學の道、その辨證法の如きは元來特殊の立場や方法ではなく、たゞことながら自身の内面的眞實態であり、事象そのものゝ理性に過ぎないのである。その展開並に體系は現象そのもの、意識の經驗そのものゝ内面的必然性を追ふことによつて獲得せられるものであり、構成主義や形式主義の如きは何等現象學には、その意圖に於て縁なきものである。精神現象學の道は決して構成的なる辨證法ではなく、むしろ意識の辨證法は決して構成的ではあり得ない。精神現象學は後年のヘーゲルに濃厚なる演繹的導出には何等の關係もなきものである。形式とはヘーゲルの表現を借りれば具體的内容そのものが自ら親しく展開し行く道そのもの (*das einheimische Werden des konkreten Inhaltsselbst* S. 37) に過ぎない。たゞ、それが體系を成す所以は、眞理は常に全體であり眞理は必ず學的體系に於て現れるからである。これがヘーゲルの

深き信念である。而して精神現象學は一定の立場や特殊の方法に媒介せられざる全く直接にして自明なる自然的意識より出發し、事象そのものゝ内的必然性を辿りて、すべてを十全に内在化する立場にまで進み行く。即ち精神現象學は、直接には存在理解の唯一の通路なる意識の構造より、すべてを「意識に對する」現象として「知る」と「對象的なるもの」の辨證法的聯關、その推移より發展の過程に於て見て行く。辨證法も實は意識の經驗の姿を現象學者が反省するとき自覺さるゝものに過ぎないのである。精神現象學の序論に於ける辨證法の敘述はそれ故現象學を具體的に遂行して最後に達した現象學者の自省に於てなされるゝものに外ならない。而して辨證法は如何に「ことがら」そのものゝ道であるにせよ、知ることゝ對象的なるものとの雙關々係に於ての辨證法ならざる限り眞實には辨證法と云ふ可からざるものである。意識も「知る」と「對象的なるもの」の關係に非ざる以上、意識の經驗ではなく、意識は常に意識の經驗として「知ること」と「對象的なるもの」の關係に於ける辨證法的過程である。意識の本質は靜止的なるノエマ・ノエシスの構造に存するのでなく、むしろ動的なる兩者の辨證法的發展、統一的過程にある、これが意識の經驗の疑ふ可からざる姿なのである。それは常に知ることの自覺に於ける推移で、自己を包み自己

の基底にある具體的全體即ち眞實態の自覺である。これが「自己内反省」に外ならぬ。この具體的眞實態は自然的意識に於ては未だ自覺せられざる非對象的全體性でなければならぬ。自己内反省とは對象存在ならぬ生命の自覺でなければならぬ。かくして精神現象學の特色は明かに意識の經驗をその内容とするところに存し、又その辨證法は意識の經驗に於ける辨證法なること明かである。これが精神現象學をヘーゲルの論理學及び歴史哲學より區別する所以のものであり、論理學に於ける理念と歴史哲學に於ける世界精神との存在様態と異りて精神現象學に於ける精神の存在様態を特色づけるものである。それは意識に於て與へられた對象との經驗より各段階の意識の形態を見行くものである。斯の如き精神現象に於ける「意識の經驗」とは我々の言葉を以て表現すれば、生の實體性を自覺し行く純真的様態の生命に外ならぬであらう。而してその辨證法は正しく生の辨證法に外ならぬであらう。ヘーゲル自身もかくの如き意識の經驗を「精神の生活」と表現してゐる。ヘーゲルの精神現象學は生の哲學と名付けらるべきものでなくて何であらうか。

十一

私は精神現象學とその辨證法の特徴を尙一層明かに特色附けることによつて、精

神現象學は生の哲學に外ならぬと云ふこの提題を漸次明かにして見よう。

精神現象學に於ける辨證法は既に明かになつたやうに、事象そのものを外より組織する形式的且構成的な外面的方法ではない、況や普通解せらるゝ如き硬澁なる三段の圖式の如きものではない。かくの如きことは辨證法の魂には本質的のものではないのである。辨證法はたゞ事象自體の内面的必然的推移の道であり、現象そのものゝ眞實態に過ぎぬ。意識の經驗が自己内反省に於て自己の充實を求め行くとき必ず經過せねばならず實現せねばならぬ經驗の實踐の道に外ならない。意識の經驗は即ち辨證法であり、辨證法的推移過程は意識の經驗の本質的様態である。それ故かゝる辨證法的理路そのものゝ理解は自然的意識や、現象學に於て觀察せらるゝ意識そのものには直接に得らるゝものではない。最も *bekannt* なものが *erkannt* ならざる如く、*ontisch* なものが *ontologisch* には最も遠きが如く、辨證法の自覺は自ら辨證法的過程の中にある意識には直接には存せざるものである。その自覺は、正當に云ふならば、現象學を遂行せる現象學者の自省にのみ俟つべきものである、換言すれば、長き途を通つて遂行された現象學がその内容に於て反省さるゝとき初めて知らるゝ意識の經驗の道なのである。併しながら意識の經驗の道も又意識の經驗を離

れて理解されようがない辨證法的過程の中に動く意識以外の何者も辨證法の道を
 知り得よう筈がない。意識の經驗とは正に自己自身を反省し行くものに外ならず、
 辨證法とは自己内への反省に於て自ら自覺し行くものに外ならないからである。
 辨證法を理解するものは自ら辨證法の中にあり、辨證法の中にあるもの亦辨證法を
 理解するものである。換言すれば、意識の經驗即ち自覺的存在の本性は自己自身を
 解釋することに存し、かゝる自己解釋の道が辨證法に外ならない。かゝるものは正
 當には純眞性の生命と表現さるべきものであらう。こゝに於て我々は現象學者に
 對して初めて辨證法が理解さるゝとするこの現象學、哲學者なるものは意識の經
 驗に超越してその外に立つ何者でもなく、究極に於てはこの意識の經驗そのもの
 外ならないことを知り得るであらう。

元來意識の經驗とはかくの如き辨證法的展開過程に於て自己を解釋し自覺しつゝ
 或はむしろ自己を解釋し自覺する經驗なるが故に辨證法的發展過程を経つゝ新
 しい意識形態となるのである。而して意識の經驗の眞實態とはかゝる發展過程そ
 のものを離れて遠く自體に存在し、過程が當に達すべき一定の境位や目標ではない、
 意識の眞實態意識の經驗とはかゝる經驗の過程そのものに外ならない。「目的その

ものは生命なき一般者に過ぎない「單なる」裸の結果は屍である(のら)。眞理は到達されたる最後の一形態に初て存するものでなく、過程そのものに常に實現されて存するのである。眞理とはかゝる過程を過程たらしめ、自ら過程に於て自己を實現しゆくものに外ならないのである。ヘーゲルの常套語を以て表現すれば「眞理は全體である」。こゝより見れば現象學者は意識の經驗を離れたる如何なるものでもない、意識の經驗以外に特殊なる現象學者を立つるものは畢竟意識の經驗の本質を理解せざるもの、現實にはかゝる意識の經驗ならざる超越的現象學者はあることが出來ぬ。現象學は意識の經驗そのものゝ自己解釋に外ならない。これ以外に現象學者を立つる者は即ち常過に墮す。併しながら又今云うた如く、自ら餘りに熟知せるもの、自ら過程の中に動くものは正にその故を以て直ちに過程を知るものではなく、又自己を理解するものでもない。意識の經驗に於て新しき意識形態新しき對象が生成する過程そのものは自らその中に動く意識には見らるゝものではない。「我々」に對して生起するものゝ内容は意識に對しては存在する。我々のみはその形式的なるもの即ちその純粹なる生起することをば理解する。この生起せるものは意識に對してはたゞ對象であるに過ぎないが、我々に、とつてはそれは同時に運動として、生起と

して存する」(S. Gs.)。この我々とは現象學者を云ふものに外ならないであらう。意識の形態の生起そのもの、意識の經驗の過程はかくの如く現象學者にのみ初めて見得るのである。現象學者を見らるゝ意識そのものに埋没せしむる者はかくして反對に斷過に墮す。かくの如く現象學者或はその立場を意識の經驗の外に立つることも、又その反對に中に立つることも共に現象學並に現象學者を眞に理解する所以ではない。嘗て區別した如く辨證法に於ては自覺に達するまでの過程の中にある立場と、自覺に達して過程を反省する立場とを一應區別しなければならぬ。前者は辨證法的過程そのものとして自然的意識であり、後者は自覺の立場として過程の動態を越ゆるものである。こゝに於て我々は知り得るであらう、現象學者は意識の經驗そのものでもなく、又それに超越するものでもない。現象學者は即ち意識の經驗の内にありて同時に外にあるもの、正しく云へば、現象學者とは意識の經驗の過程の中にあり、それに身を委ねながら、常に綜合的全體の立場に立ちてこの過程を見る者、換言すれば意識の經驗の綜合的全體を自覺して自ら意識の經驗の過程に動く意識の經驗そのものに外ならないのである。意識の經驗とは自然的意識がそれ自身の辨證法的動性に於て、未だ自覺せざる自己の眞實態即ち未だ自覺せざりし自己の具

體的全體性をば自覺するに至ることに外ならない以上現象學者とは正に現象學の各段階に於て綜合的全體性の自覺の上に過程そのものを見るもの、過程そのものを見ながらそれを止揚して綜合的全體にあるもの、即ち自覺せる具體的全體そのものに外ならない。換言すれば過程と全體に於ける生の非純眞的様態を放下して生の純眞的様態に立てる生の An-und Für-sich-sein が精神現象學者そのものである。現象學者はかく意識の經驗の各段階に於ける綜合的立場に立つのであつて、常にその最終段階即ち所謂絶對知に立つ必要はない。而してかゝる生の綜合的全體は過程にある生にとつて未だ理解せられず對象存在ならざる非對象的生命に外ならぬ以上精神現象學は明かに生の自己解釋に外ならない。こゝより亦逆に生の自己解釋が辨證法をなすことも明かである。辨證法は精神現象學者の自省に於て自覺さるゝもの、それは畢竟生命の自省に於て理解せらるゝ純眞性の生命の構造に外ならぬ。ヘーゲルの精神現象は斯くして正當に生の自己解釋としての生の哲學と呼ばれうるものに非ずして何であるか。精神現象學の辨證法は明かに生の辨證法である。精神現象學はすべての意識の形態を経験する生命の自己解釋である、換言すれば精神現象學はあらゆる意識の形態を遍歴してそれを理解し行く精神現象學者の生活

の自省である。精神現象學は單なる生の分析でもなく、生の心理學の如きものではない、それは生の形式として嘗て生より生み出され體驗された存在の形態即ち意識の形態をその全體性に於て再び自ら體驗し理解せんとするものである。生の哲學は歴史上の存在形態をすべて生の形態として理解せんとする要求を内在する。生の自己解釋 (Selbstauslegung des Lebens) は生の自省 (Selbstbesinnung des Lebens) であり、それは常に必ず實踐的なる生の地盤に於て辨證法の過程をなし、それによつてのみ初めて可能となる。元來實踐的ならざる生命はなく、實踐を離れた自覺の如きものはない。生の自省も、自己解釋も常にかゝる生命の實踐を基底とし地盤とする。併し生の自省は實踐的生の反省であつて、それ自らは直接には實踐的過程の中に動くのではない。生の自己解釋の學はかゝる生の形態その生成を見る立場に立つのであつて、精神現象學に於ても意識の經驗の系列が學的なる道に高められるのは現象學者に對しては、ある、それは決して意識に對しては、ない (S. 62)。こゝに於て初めて「學への道それ自身が既に學」(S. 62) たることが出来るのである。現象學者は意識の經驗に於て生活の過程に自ら身を投ずる、その限り現象學者は常に實踐的である。併し現象學者は、又綜合的全體に於て意識の經驗意識の形態の生起そのものを觀なけ

ればならぬ、然らざれば現象學は成立することが出來ぬ、こゝに現象學者は靜觀的である。これは辨證法的過程が常に實踐的なる動的過程たるに對し、綜合的統一の自覺の立場がかゝる過程を越えてそれを反省する觀想的態度に出づるに基く。而も今明かにされた如く現象學者なるものは一つの全體なる生そのものに外ならぬ、實踐的靜觀的は全體なる生そのもの、辨證法的なる統一の兩面に過ぎぬ。生そのものは常にかゝる二つの態度をもつ、或はかゝる兩様の辨證法的統一が生である。兩者を斷常の見に立ちて解するものは生の純真的構造を理解せざるもの、生とはかくの如き兩者の限りなき辨證法的發展その内在的統一である。生の自己解釋はその基礎に於てかゝる辨證法的統一をば缺くことが出來ないのである。

以上に於て我々は精神現象學が事象そのもの、內的必然の道を進みながら尙その中に於て演ずる現象學者の役を理解し、それが學となる所以而もその學が畢竟生の自己解釋なる所以を了解し得たであらう。

私は、今迄精神現象學の辨證法をば忠實にヘーゲルの意を辿り乍ら主として知ること、に對して初めから自體に存在する對象的なるものとの對立關係より出發し、實はかゝる自體的存在も對意識的存在として超越的存在でなく、自覺に於て超越的、獨

存的と意識された存在が漸次内在化されて行く動的推移の動向より辨證法の主旨を見た。併しこれは他面よれ見れば、又精神現象學に於てヘーゲル自身が云ふ如く、辨證法とは精神が自ら、他者となり、即ち自らを疎外して自己自身の對象となり、この他在 (Anderssein) をば止揚するに至る運動に外ならない。これが意識の「經驗」と稱せらるゝのであつて、かくの如き辨證法的運動が今嚴密に規定した如き意味に於ける現象學者に對してのみ云はれ得ることは云ふ迄もない。辨證法に於ては、ヘーゲル自身をして云はしむるならば「直接的なるもの、未だ經驗せられざるもの、即ち抽象的なるものは——感性的存在のそれであれ、將ただ考へられたに過ぎない單純なるものゝそれであれ——自らを疎外し、然る後この疎外より自己に還歸する、かくして初めて抽象的なるものは自らの眞實態と現實態に於て現される」(S. 23)。これが元來意識の本性に外ならず、この運動が「經驗」に外ならない。精神の所謂直接的存在たる意識は「二つの契機即ち知ること (Wissen) とそれに否定的なる對象的なるもの (Gegenständlichkeit) との契機をもつ。精神が意識のこの要素に發展し、意識の諸要素を解釋するやそれらは知ることゝ對象的なるものに對立するやうになる。そしてそれ等の要素はすべて意識の形態として現れるのである」(S. 24)。辨證法に於ける「存在

者の運動とは一面に於ては他者となり、かくして存在者の内在的な内容となることである。他面に於てはそれはこの展開とこの存在をば自己自身の中に取り返して、自己自身を一つの契機となし限定的状態に單純化する(§. 36)。これは初めの運動に於ては存在が自己の否定性より自己ならざる他の存在を區別して他の存在としてそこに定立することであり、後の運動即ち存在の自己内への還歸に於ては再びその否定性によりて一定の單純態、自己同一態に成ることである。意識は自然的なる状態に於ては知ること、對象的なるもの、對立である。併しこれは意識の最も直接なる状態に於ては未だ特に對立の意義と自覺をもたぬ並列の状態が、他の存在を自己より區別して定立し、これを理解し、解釋すると同時に自己との對立的境位に進展し、又他者を對立の状況に於て見、それを解釋するとき、他者は自己の疎外せられたものとなつて自己の眞實態を理解し自覺して、自己同一の一つの單純なる限定態(Bewusstheit)となることに外ならない。それは存在の自己自身への還歸であり、これが意識の經驗の或は精神の否定性と稱せらるゝのである。ヘーゲルに於てこの存在或は存在者と云はれるものは畢竟は自覺的存在即ち「生命」を云ふものであつて、後に明かにする如く、精神現象學は眞實には所謂「自覺」(Selbstbewusstsein)以後の領域をその

本態とするものでなければならぬ。眞に具體的なる意識の經驗がその辨證法的運動をなすものは全體のなる生命即ち自覺的存在或は所謂「自覺」に於てある。所謂感性的確實性や知覺の如きは全體のなる意識の經驗に於て技巧的構成的に抽象せられた状態であつて、單なる感性的確實性や單なる知覺は生の體驗にとつては畢竟一つの虚構的状态に過ぎぬ。全體のなる意識の經驗にかゝる抽象的状态はない、辨證法的なる意識の經驗はかゝる感性的、部分的のものではない。辨證法はたゞ自覺の道として、自覺的存在の存在の様態であり、こゝに於て存在は他者となる、他者(Anderes)とは畢竟他在(Andersein)に外ならない。併しかく自己が他在となること云ひ得るは、即ちこのなる、生成の過程は前に明かになつた如く、たゞ現象學者に對して云ひ得るのみ、それは意識の經驗の自省を俟つて初めて知らるゝのである。それは決して意識が他我を、が非我を自己自身より生産し、發出し流出する如きものではない。かゝる神祕的形而上的經驗ありとするも、それは意識の經驗ではない。又かゝるものは元來意識の經驗であるべき筈がない。他在と云はれ、自己疎外と云はれるものは生命の表現或は生命の自己對象化に外ならないのである。その場合表現や自己疎外が表現であり自己疎外たることを知らるゝのは勿論現象學者の反省に於て即

ち生命や「意識の經驗」の自省に於てはあつて、生命や意識の經驗が表現をば表現と意識し、自己疎外をば自己疎外と自覺して自己を表現し自らを疎外するものではない。かくの如き意識的運動は表現と名付くことも、自己疎外と名付くことも無意義である、表現や自己疎外とはかくの如き意識内の運動ではない。生の現象學はかゝる心理作用の様態を問題とするものではなく、歴史的社會的存在形態を生をの形態とし、それを生の表現と解し行くものである。生の哲學は主觀的なる人間の生の構造、その形態を問題とするものではない。表現はその解釋に於て初めて表現たることを知られ、他在は自己同一の綜合的自覺の立場に於て初めて自己の疎外と知らるゝのである。そしてこれが即ち自ら表現し、他在を包む全體的な生命そのものゝ理解に外ならない。換言すれば表現とはかゝる全體的な生命の表現であつたのであり、表現の理解はかゝる全體的な生命の理解なのである。かくして意識の經驗は常に自己の中に、それ自らは對象存在ならぬ全體者を自覺し行く。それは自己ならざるもの自己の外に立つものを媒介し、その解釋によりて、それが自らの疎外態たることを知りて具體的全體的なるものを知り行くことである。それは自覺によつて自己の一定の形態を否定して新しき眞實の形態に推移發展することに外ならず、所謂否

定性とは生の自己超克性をば意味するに過ぎないのである。

かくの如き意味に於てのみ、意識の経験とは現象學者に對しては存在が他在となり、それが一つの自己同一態に止揚さるゝ過程である。併し、意識の経験は常に過程であつて、自己同一の限定態は一つの限定態としてその反省に於て實は又一つの定立的樣態に外ならない。それは依然として他と對立の境位に過ぎない。直接的、抽象的自覺の眞實態は又新しき對立となる。換言すればそれは前と異なる樣態に於ては又云ふまでもなく自覺である。然らばかくの如く直接なる樣態の自覺が再び自己ならざるものとの對立の意識に轉じ、これが再び自覺に於て止揚せらるゝ根據は何處に存するのであるか。換言すれば、精神現象學に於ける意識の経験の發展の原理は如何なるところにあるのであるか。それは明かに知ることゝ對象的なことゝの間の不等(Ungleichheit)に存するより外ない。換言すれば知と對象が十全に合一せられず、意識の経験が完全に充實せられざること、ヘーゲルの言葉をして云はしむれば「否定的なるもの一般(das Negative überhaupt)に存するのである。(S. 25)」。かくる否定的なるもの一般が意識の経験の實踐的發展の動機に外ならないのである、即

ち生の實踐の原理なのである。直接なる自覺に於ては對象は意識にあるもの、他者は實は自己の中に措定せられたものとして意識は自己自身を對象としてゐると思ふても、それは假令前と形態を異にするにせよ、兩者に不同の存する限り、それはやはり自己ならざるもの、對象的なるものであつて、知ることに對立する。對象と知が完全に一致しその間に何等の間隙も存せざるやうにならざる限り、辨證法的發展は止りようがない。而して兩者の完全に一つになるところ、最早や知ると云ふことは不可能であらう、これをも知と名附ければそれは正に絶對知とでも云ふより外はない。かくの如くにして自覺は常に自然的意識に轉落する。辨證法的發展 (Entwickelung) は必ずしも直線的なる價值の向上としての進歩 (Fortschritt) ではない。辨證法的發展の生には常に何等かの形の *décadence* を内在する。純眞的生は必ずしも常に進歩的生ではないのである。知ることゝ對象的なるものゝ對立は現象學の各段階に於て種々なる形態をなすであらう、それは決して同一なる形態に於ての知と對象の對立ではない。併しそれは常に自然的意識の境位への轉落と自覺に於ける自然的意識の止揚の交替を逃れ得ない。むしろ辨證法的なる意識の經驗に於ては自己ならざるものは自己に對立するもの、自己の存在を妨げる障礙である。かゝる自己の存在

を否定する障碍の境位に於てこそ意識は初めて自覺の境位へ進展し得る。障碍が、否定的なるもの一般が自覺の原理である。而してヘーゲルによれば「意識」の段階に於ける確實性の様態は意識に對して眞實なるものが意識以外の或る他のものであることである。「自覺」の段階に於ては確實性はその眞實態と同一である。確實性自身が自らの對象である、意識が自身眞實なるものである。「自覺」とは所謂「自己自身の確實性の眞實態」である。勿論そこにも他在はある。「即ち意識は區別する。併しそれは意識にとつて同時に區別せられざる如きものとしてある」(cf. S. 113)。併しかゝる意識の状態たる自覺はその獨立性、非獨立性の對立主従の如き對立の境位を經、次には自ら相反噬する二つの意識相矛盾する二つの魂としての「不幸なる意識」の状態を經て初めて「自覺」の眞の確實性に達する。この確實性に於ける統一態は勿論自覺ではあるが、ヘーゲルによれば「理性」(Vernunft)と名付けらるべき段階であり、理性の確實性とは個別態に於て絶對的に自體たること即ち自らがすべての實在たる意識の確實性である。而して自己がすべての實在たる確實性が眞實となり、自ら自己自身を自己の世界なりと意識し、世界を自己自身なりと意識するとき理性は「精神」(Geist)である。ヘーゲルによればこの「精神」は民族の道德的生命であり、普遍的なる精神で

はあるがその直接なる眞實態に於て精神は自ら一個の世界なる個人である。而して超個人的なる絶對的精神が意識の對象となり種々なる「形態」に於て表象せられる「宗教」(Religion)の段階を経てそれが完全な認識に於て知らるゝ「絶對知」に至るとき、そこはヘーゲルによれば「概念」であり、學であり、未だ宗教にも存した確實性の間隙は完全に廢棄せられ、精神は精神としての十全なる自覺に達する。こゝに辨證法は終止するに至る。こゝより見ても精神の自己認識、その自覺たる辨證法的發展の原理はからゆる對立關係に於ける間隙、不等、否定的なるものに存し、その確實性の最も高き眞實態、あらゆる不等的對立の止揚せられた状態への到達が辨證法的發展の目標(Ziel)である。換言すれば精神の自己同一の不確實、自己自身との不同一、他者の自己への障碍存在たることが精神の自己内反省即自覺の根本動機であり、これは畢竟純眞の様態の生命がその實體性を目標として自己の完全なる充實を獲得し行くことに外ならない。生命の否定性とはかくの如きものを意味する。辨證法はかくして抽象の様態の抽象的自己同一よりその内的矛盾を自覺しつゝ、具體の様態の具體的自己同一へと、部分的なるものより全體なるものへ躍進する生命の過程、生の自己超越の道に外ならないのである。勿論この場合抽象の様態の意識形態は意識形態

として消滅し實存せざるものとなるのではない。即ちその領域が否定されてしまふのではない。それは特殊なる意識形態として即ち生の形式形態として現象學者に對して實存する。それは生の形態として止揚せらるゝのではなく、むしろ意識の經驗の生の全體に於て一定の地位を獲得する。これは産み出されたものは産み出す生の母胎、生の地盤より離れて獨立的なる存在となる生の構造より明かである。精神現象學はかゝる生の産物を歴史の中より取り來り、何等か一般的なる意識の形態として再體驗し、精神より解釋するものに外ならないのである。こゝに於て我々は知り得るであらう。精神現象學に於ける各種の「意識の形態」は歴史の中に於て現れ而もたゞそれに過ぎない歴史的形態として、はたなく、廣く類型として見らるべき生の形態に外ならないのである。

辨證法的發展とは既に明かな如く、自覺的なる存在が他在となり、この他在が止揚せられて統一的なる限定態となることである。勿論これは現象學者の反省に於て理解せらるゝものなることは今明かにした如くであるが、かゝる統一態に止揚せらるゝことは、他在が他在として存在に對立するに至り、對立として他在が解釋さるゝときその對立を成立せしむる全體的地盤としての眞實態、現實態が理解され自覺さる

こと外ならぬのである。この場合綜合として達せられた自覺の狀況に於ては前の對立はその意義を失ひて新しき意義を得て、一つの新しき意識形態となるのである。この眞實態の自覺とは自らの自己疎外に於て實はその基底にありながらそれをば理解するに至らざりし、非對象的なる全體の自覺である。それは他在を理解し解釋することによつて他在が自己の對象化、自己疎外なりしを知り、同時にこれと自己を包む具體的全體的のものを自覺することに外ならぬのである。表現とは實はかゝる全體者の表現だつたのである。自己は他在を解釋して初めて自己を知るのである、勿論この自覺的自己は元の自己ではない。これを換言すれば意識の經驗に於ては自己否定、自己疎外とその對立の媒介をへて初めてその基底に存せし全體のものが自覺さるゝに至るのである。かゝる意識の經驗は即ち自己内反省であり、自己内反省とは非對象的なるもの、未だ對象的ならざる自己對象化された自己は眞の自己ではない、自己の眞實態ではないを自覺することに外ならぬ。こゝより自覺せらるゝに至るかゝる全體のものは明かに對象的なる Substanz と云はるべきでなく、むしろ非對象的なる Subjekt と云はれねばならぬ。逆に云へば Substanz は Subjekt なければならぬ。ヘーゲルは明かに *Substanz* がそれ自ら *Subjekt* である

ことにより一般にあらゆる内容は自己内反省である」(S. 37)。精神現象學の主體は Subject なるが故にすべての意識の經驗は自己内反省であり、且自己内反省の可能な限り、精神としての主體は Subject でなければならぬ。それは客觀と相對立する如き主觀を意味するのではない、對立する主觀の如きは畢竟一つの客觀的存在に過ぎぬ。而してこのことは、すべてを「意識に對する」ものとして、意識の經驗として「知ること」と「對象的なるもの」の辨證法的過程を唯一の原理とする精神現象學に於てこそ初めて眞實の意味に於て云はれ得るであらう。精神はそれ自身決して對象ではない、對象存在ではない。これが又精神現象學を(結果より見て)ヘーゲルの他の體系より區別して特長づけるものである。辨證法が自覺的存在の自己内反省に於て Subject を具體的に自覺し行くことは私が前に解釋した如く、生が自己對象化としての表現を媒介し、それとの對立葛藤を通して、實はかゝる表現をして表現たらしむる全體的生命、それ自身は對象存在ならぬ不可得的生命を自覺することに外ならない。表現は解釋によりて初めて表現であり、この表現による全體的生命の自覺は生命に於ては生命の發展である。それは恰もヘーゲルの所謂眞理なるものが、認識論の意味に於ける對象認識の眞理を問題とするものには非ざる如く、或る一つの表現の解釋が

妥當であるか否かを問題とするのではない、精神現象學はかゝる解釋の確實性を問題とするのではなく、自覺の確實性を問題とする。それは解釋術ではない。それは意識の經驗の換言すれば生の自己解釋に外ならない。「意識の經驗」とは「自覺的存在」であり「生」である。かくの如くにして *being* の解釋より精神現象學が生の哲學であり、その辨證法が生の辨證法なることは再び、より確實に、明かになつたと思ふ。

我々は以上に於てヘーゲルの精神現象學の特色を多少明かにすることによつて、それが生の自己解釋として生の哲學なることを自覺し得ると共に、私が前より生の哲學と稱し生の辨證法と名付くるものゝ内容が、精神現象學の典型によつて多少明かになり得ると思ふ。

以上の所論を纏めれば、我々は明かに之を次の如く論結し得るであらう。精神現象學の辨證法は常に「意識の經驗」に於ける辨證法であつて、意識の本質たる「知ること」と「對象的なるもの」との關係に於て兩者の十全なる自己同一態を目標として發展する。それは單に「知ること」の間に於ける推移ではなく、又單に「對象的なるもの」の間に於ける推移でもない。辨證法は、辨證法たる限り、必ず「知ること」と「對象的なるもの」の間の内面的必然的なる推移であり、この推移は「知ること」の自覺に外ならないのであ

る。これは必ず對象的なるものゝ解釋とその媒介に基き、意識の經驗の否定性によつて對象存在ならぬ Subject に還歸するもの、即ち自己内反省である。かゝる辨證法的推移はヘーゲルの精神現象學がその内容的なる遂行に於て明示する如く、意識の經驗そのものゝ本質に外ならないのである。辨證法が論理なりや否やは別問題として意識の經驗はかゝる辨證法的構造をもつのである、これは「知ること」と「對象的なるもの」の對立的境位に於ては未だ自覺せられざる眞實態がその對立葛藤を媒介として自覺さるゝに至ることであつて、意識の經驗の自覺は常にかゝる媒介によらずしては不可能である。精神現象學に於ては意識に超越せる現象學者が方法的媒介をなした後、具體的なる事象性を遊離した立場より純粹意識の構造を見るのではなく、むしろ現象學者は常に見らるゝ意識と共に自ら媒介を経て、自らを否定しながら、その基底にある眞實態を自覺し、これを觀行くのである。意識の經驗に於ては或ものゝ存在は必ずそれを越える全體的のものとの聯絡、それの上に於て可能なのであり、反省に於てかゝる全體的のものを初めて自覺すること、換言すれば部分的のもの、抽象的のものは常に全體的のもの、具體的のものゝ上に於て可能なのであり、部分的、抽象的のものが孤立化的絶對化の非純眞性を離れて常に全體的、具體的のものを

自覺すること——これが意識の經驗の何等の構成を俟たざる自明の本質なのである。而もかゝる全體的、具體的のものが自己そのもの、眞實態であつて、自らは決して對象存在ならぬもの、意識の經驗とはかくして對象存在ならぬ自己の根柢に自己否定による媒介を経て自覺し行く過程である。意識の本性は自覺に外ならない。意識の本性としての「知ること」は如何に對立する作用ではなく、對立者を包む自覺に外ならないのである。

かゝる「意識の經驗」は何等對立の意識なき生の *An-sich-sein* の境位が相互否認の對立的境位を経て、かゝる對立的關係の基底にあり、それを成立せしめる全體を自覺すること、即ち對立的境位に於て他を否認して自己の獨在性を主張する *Für-sich-sein* の狀況より、その對立を成立せしめ而も對立者には知られざりし超對立者を新たに自覺して相互是認の自覺的境位たる *An-und-Für-sich-sein* に發展することに外ならない。換言すればそれは嘗て述べた如く生の辨證法であつて、純眞的非純眞的樣態の對立を初め種々の葛藤轉落を通して生の完全なる自己充實性を求め、生の實體性を自覺し行くことである。(第七節參照)。この場合自覺せらるゝ全體的生命はそれ自身は對象存在ならぬ不可得の生命である。これの自覺せられた立場より見らるゝとき(こ

これは嘗て明かに區別した如く自覺に至る生の過程とは異なる)「Fürsichsein」の對立的境位は生命の自己自身に於ける對立であり他者は生命の表現なりしことが自覺せらるゝ。表現とは全體的生命の自己ならざるものへの對象化である、ヘーゲルの他在も自己疎外もこれに過ぎない。併しそれは常にかゝる全體の自覺の立場に於て表現と云はれるものであつて、表現の理解は全體的生命の自覺に於て初めて得られるのである。而して逆に全體的生命の理解は表現の解釋を媒介してのみ達しうるのであり、生の辨證法とはそれ故生命の自己解釋の道に外ならぬのである。而してかゝる自己解釋を通してのみ生の發展が可能であり、それなくして生の發展は現實に於て不可能である。これは逆に言へば表現と解釋は常にかゝる生の辨證法的發展に於て存するのであり、その根柢にはかゝる辨證法的統一がなければならぬ。精神現象學の道はかゝる生の自己解釋なること明かである。所謂「意識の經驗」とはかゝる「生」即ち「自覺的存在」であり、所謂「意識の形態」とは「類型的なる生の形態」を意味するものに外ならない。生の自己解釋たる生の解釋學的存在論も當然かゝる生の辨證法的發展を認めるに至るべきものと思ふ。

ヘーゲルの精神現象學は生の哲學である。

(未完)